

# 京都のイベント、もっとエコに

観光のまち、学生のまちであり、地域の伝統行事が今も数多く受け継がれる京都。

日本三大祭の一つに数えられる祇園祭から観光行事、学園祭、地藏盆や

地域のお祭りまで年間1万件を超えるイベントが催されています。

一方、たくさんの人が集まるイベントは短期間で大量のごみが発生し、

環境に大きな負荷を与えるものであるも確か。

そこで、どうすれば一つひとつのイベントを「エコ」にできるか

皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

イベントを企画・主催する人が、少しでも多く環境について考えること。

それはやがて参加者へ伝わり、京都からやがて世界へと

エコ意識が広まっていくことにつながるのではないのでしょうか。



## CONTENTS

### 目次

- 01 京都のイベント、もっとエコに
- 03 巻頭インタビュー くるり&京都女子大学  
くるりのお二人に聞く。「音博」で感じたこと。
- 09 エコイベントの先駆者たち  
美しい祇園祭をつくる会、  
同志社京田辺祭2009実行委員会、  
京都女子大学「SHIBARIWA」、京都サンガF.C.、  
特定非営利活動法人「環境市民」
- 19 イベントをエコにしてみよう！  
ステップ01 企画・準備  
・エコイベント成功のための………20  
27のチェックポイント  
・「京都市認定エコイベント」への登録………25  
・「リユース食器」助成金制度………26  
ステップ02 実施・運営  
・イベント会場「ごみ減量大作戦!!」………27  
・「ごみステーション」をつくろう!………29  
ステップ03 検証・まとめ  
・成果を次へ活かすために………30

DO YOU KYOTO?

# 巻頭インタビュー くるりのお二人に聞く。 「音博」で感じたこと。

京都出身のミュージシャン「くるり」。  
そのメジャーデビュー10周年を記念してはじまった「京都音楽博覧会」。  
出演はもちろん、直接プロデュースもされているお二人に、  
京都女子大学の学生さんがその経験で感じたことをお聞きました。

くるり／岸田 繁さん(後列):vocal,guitar・佐藤征史さん(前列右):bass  
インタビュー／翼 麗衣さん(前列左)・八田和子さん(前列中):京都女子大学



**くるり Profile**  
1996年に立命館大学にて結成。1998年メジャーデビュー。「みやこ音楽祭」「京都音楽博覧会」など地元・京都での音楽イベントにも力を入れている。



京都音楽博覧会(梅小路公園)

## 京都で誰もやってないイベントをやりたい

**京女:**くるりさんは2007年から野外音楽フェスティバル「京都音楽博覧会(以下、音博)」を主催してらっしゃいますが、始められたきっかけは?

**岸田:**そうメジャーデビュー10周年。京都で組んだバンドですから京都で何かやりたいと考えていて、どうせやったら誰もやってない場所で、誰もやってないことをやろう、という話から梅小路公園で野外フェスをやらしてもらうことになりました。最初はその年だけと思ってたんですが、そのあとも続けさせてもらってます。

**京女:**2010年で4回目ですね。

**岸田:**1年目のライブで、お客さんから「来年もやって!」って言われたんです。それでステージ上で「次もやるぞ!」と約束してしまった(笑)。

**佐藤:**音博のステージは他の野外フェスと違って夜ではなく昼間、芝生の上でやります。ちょうど自分たちの出番の 때가 夕暮れで。ライトを浴びるとみんなの顔だけが一杯輝かんで見えるんです。

**京女:**それは素敵ですね。

**佐藤:**みんな、すごくいい顔になるんですよ。



自分たちが主催するライブでこんなことを言うと自己満足と言われるかもしれないけど、その顔をステージ上で感じられるというのはかなり大きな喜びです。すごく幸せなイベントやと思うんです。実際には大変なことも多いんですけど、自分たちもいろんなジャンルや海外のミュージシャンの方と触れ合えてライブも見られるので、できることなら続けたいと思いますね。

### 知恵を出し合えば ムダはなくせる

**京女:**野外音楽フェスと言えば、終わったあととはごみの山…というイメージが強いんですが、それが音博では、分別用のごみ袋を配ったり、リユース食器を使ったりと、エコ化に積極的です。

**岸田:**エコという言葉自体、今は形骸化さ

れてるところもあって、「環境にいいことしてる」とか「これはエコですね」とか言うことが自分にとってどういうことなのか。まずは「知ること」が大事やと思うんです。まあ、一番のエコは音博をやらないことなんです。

**京女:**そんな!(笑)

**岸田:**やらなければごみも出ないし。でもそんなこと言ってたら何もできなくなる。知恵を出し合って、どうやってムダをなくすか。お金をかけない、処理に手間がかからないイベントのやり方とか。その方法をまずは考えなくてはいけない。音博では、始めた当初からリユース食器や、ごみの分別に取り組んでらっしゃる団体の方に参加してもらっています。

**京女:**知って考えることが大事なんですね。

**岸田:**もちろん僕たちも完璧にできてとは思ってないです。皆さんは環境を専攻されてる学生さんなんでご存じだと思うんですが、



結果的にムダをなくすことだと思うんです。もったいないという感覚があれば、普通に行えることもあるから。

### 考えるきっかけを 持って帰ってもらう

**岸田:**最近いろんな音楽フェスがあって、“フェスバブル”って言われてますが、フェスはだいぶ昔からあるもので、60年代のアメリカのウッドストックとかではいろんなミュージシャンが集まって、音楽を通じて自由や高揚感を感じたり、新しい価値観を持ったりした。もちろんその頃は環境問題やエコなんて概念は一切ないけど、やっぱり僕らロック好きからすると美しいものとして語られている。今は僕らみたいなロックバンドがイベントをやると、絶対環境に取り組むとかエコとか枕詞をつけなあかんみたいところもあるんですけど、それは僕はカッコ悪いと思ってるんです。そんなことは個人個人が取り組むことです。

**京女:**参加する側も、エコ活動をしに行くんじゃなく、音楽を聴きに行くのですね。

**岸田:**来てくれた人、やらせてもらっている土地に対して、モノとかお金とかじゃない、いい価値観とか、楽しかったなあという気持ちとか、そういう目に見えへんものをちゃんと持ち帰ってもらうことが大事。そういう思いのあるイベントは、自然とみんなにごみをばら撒かせない。道理が通ってへんイベントではダメなんです。

**佐藤:**たとえば山に登ると「ごみは持って帰ろう」って自然に思いませんか。普段はせえへんけど、すれ違おばちゃんに「こ

マイ箸ってあるじゃないですか。割り箸をやめてマイ箸を使えば環境にやさしいってみんな思ってる。僕も買ってみたいんですけど。でもちょうど去年の夏の終わりごろ、京都に帰ってきたら山が赤かったんですよ。地元の人に「えらい今年は紅葉が早いですね」って聞いたら「あれは虫ですよん」って。

**京女:**ナラ枯れですね。

**岸田:**山の持ち主が林業をやめてしまって、手入れがされていない。その話を聞いてよくよく考えたら、割り箸がもったいないからといってマイ箸を使えば、日本で林業が衰退して結果、山が放っとかれて虫がわく。極端に言うとエコが産業の衰退につながるかもしれない。もちろん、そんな単純なことではないけど。ただそう考えたら、マイ箸と割り箸、いったいどっちがええことなんやろって考えてしまう。

**京女:**わが校でも間伐材を使った国産割り箸を普及させようと起業したグループがあるんです(詳細は13ページ)。マイ箸も割り箸もそれぞれ利点があって何が正解か難しいですね。よくよく考えないと。

**佐藤:**いろんな方法が一杯あっていいと思う。



んにちは]って挨拶したりとか。その場に行ったら「そうせなあかん」空気がある。

**京女:**音博の会場でごみが散らかっていないのは、そういう空気感があるからですね。音楽を聴きにきた人が、たまたま会場でリユース食器という方法があったのかと知って、一つでも考えるきっかけを持って帰ってもらおう。大がかりなことではなく、ずっと身近に入ってくるようなものもいいんですよ。

**岸田:**だから、音博というイベントで何ができるのか分からへんけれども、自分たちが音楽をやって伝えるメッセージの一つには、それぞれが「深く考えよう」ということがあると思うんです。音博もそれを推進する一つであればいいかと思ってる。

長く続いていることに  
知恵とヒントがある

**岸田:**音博の会場が芝生敷きなんですけど、土のあるところはやっぱり自分が「生き物」

な感じがすると思うんですよ。ちょっとやらかい気持ちになる。

**京女:**京都ならではの雰囲気というのもあるんでしょうか。

**岸田:**ありますね、それは。京都に帰って来るといつも思うんですが、建物の高さが低いでしょ。これは相当頭がいいなと思います。住んでる人も多いし、僕が不動産屋やって高いマンション建てたいし、こんなもったいない土地の使い方はない。でも朝起きて山が見える。京都にいたときは分からへんかったけど、実際東京に住んでると圧迫される感じがあるんですね。大都市なら京都がホッとする。エコと直接つながらないかもしれないけど、まちの作り方とかを深く考えていくとヒントがたくさんあるのかな、と思うんです。

**京女:**そうかもしれないですね。

**佐藤:**昔から続いているものって、自然に沿って形ができて、今まで続いているじゃないですか。これって意外と理にかなってたりするこ

とが多くて、昔の人の知恵じゃないですけど、実は自然のルールを分かっていたりするんじゃないかなと思うんです。

**岸田:**昔のおばあちゃんの知恵ってあるでしょう。野菜が腐らへんようにお漬けもんにしようとか。そういう長く続いていることに、結局ヒントがあるんじゃないかな、と最近思うんですよ。

**京女:**昔から続いていることというのは、意味があって、そこから得られる知恵がある。

**岸田:**何も「エコや!」と思ってお漬けもん

漬けてるわけじゃないけど(笑)。

**京女:**当たり前だったことを見直してみると、考えるきっかけ、深く知るきっかけになればいいですよね。お話を伺って、音博を観に行くのが楽しみになりました。

**岸田:**いや、正直まったく儲からないイベントなんですけど…。

**京女:**ぜひ続けてください。

**佐藤:**がんばります。

**京女:**9月を楽しみにしています。今日は本当にありがとうございました。

紹介します

インタビューに協力いただいた京都女子大学・蒲生ゼミの皆さん



蒲生先生を囲むゼミの皆さん



手作りのリサイクル作品(キャップ回収容器、エコバッグ等)

くるりさんへのインタビューに協力いただいたのは、京都女子大学・蒲生ゼミのお二人。質問はゼミのみみんなで一緒に相談して作成してくれました。環境が専門の蒲生先生の下、地域のふれあいまつりでリユース食器のボランティアをしたり、小学生にリサイクル工作を指導したりと、教室を飛び出したフィールドワークをモットーとする行動派のゼミです。

◎インタビューを終えて  
じっくり考え、丁寧に応えてくださったのが印象的でした。有名なミュージシャンの方が身近なところからエコを取り入れて、何かを考える「きっかけ」を広くつくってくださることが、とても心強いと感じました。

協力/京都女子大学 蒲生ゼミ (上左から) 滝川賀奈子さん、多田しおりさん、蒲生先生、竹村沙央里さん、中村 愛さん、眞岸寛子さん (下左から) 巽 麗衣さん、八田和子さん、飛坂 舞さん、吉田江里さん